

A 12月17日(火) 19:00～ **アフタートーク**
1作品 90分 (予定)

父とその父と、僕

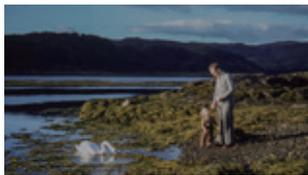
デジタル/90分 (予定)/2019
監督/撮影 ハイミッシュ・キャンベル/
翻訳 岡本美奈子

2019年9月、アーティスト、ハイミッシュ・キャンベルと父のピーターはスコットランドを旅した。1957年に父と祖父が歩いた道を迎るために。最近祖父そして、父を亡くした彼らがスコットランドのハイランド地方を巡りながら、家族の思い出を語り合い、父から息子へ受け継がれてゆくものを見つめ直す。

ハイミッシュ・キャンベル

写真家/映像作家。オーストラリア、シドニー出身。10年前に来日し、日本在住。孤独という主題を文化的、社会的、時間的、そして地理的な観点から追及している。映像作品の多くはドキュメンタリー。次の作品では、福島県南相馬の侍たちが東日本大震災の津波で失ったアイデンティティを再構築していく姿に迫る。

www.hamish-campbell.com



B 12月21日(土) 19:00～ **アフタートーク**
1作品 20分 (予定)

トオイと正人 (予告篇)

デジタル/20分 (予定)/2019
監督 小林紀晴/原作 瀬戸正人/脚本 小林紀晴/撮影 小林紀晴、尾崎聖也、今井知佑/出演 瀬戸正人、尾方聖夜

残留日本兵の父とベトナム系タイ人の母との間にタイ・ウドンタニ生まれた「トオイ」は、8歳の時に日本に渡り「正人」と呼ばれるようになった。その後、写真家になった「正人」は、バンコク、生まれ故郷のウドンタニへ旅に出る。「トオイ」の遠い記憶が、正人の奥底から溢れ出し、やがて「トオイ」と残留日本兵の父の姿をメコン川の遥か彼方に見る。写真家・瀬戸正人の著作『トオイと正人』を原作としたノンフィクション。タイ、福島でロケを敢行。

小林紀晴

1968年長野県生まれ。東京工芸大学短期大学部写真科卒業。新聞社カメラマンを経て独立。20代よりアジアを旅し、『ASIAN JAPANESE』で脚光を浴びる。1997年『DAYS ASIA』で日本写真協会新人賞、2013年『遠くから来た舟』で第22回林忠彦賞を受賞。



C 12月24日(火) 19:00～ **アフタートーク**
1作品 45分

オーラクマガイセイジ

45分/2019
『オーラクマガイセイジ』は、『FOCUS』シリーズより派生したもので、1999年～2018年まで作品を断続的に作ってきました。カメラのピントを最短距離に合わせ撮影する。おのずと「ピント」がずれた写真が出来る。[乱視の眼で世界をとらえるピントのはずれた写真たちはなにが写っているということよりひかりそのものが織りなす、淡い色や形を想起させる] カラースライドフィルムをプロジェクターで映し、熊谷自身が音を奏でます。

熊谷聖司

写真家。1966年北海道函館市生まれ。1987年日本工学院専門学校卒業。個展に『もりとでじゃねいろ』『あかるいほうへ』など。写真集多数。2019年スライドショーを各地で上映。書店レーベル「マルクマ本店」運営。

HP: sejikumagai.wixsite.com/mysite

マルクマ本店: kumagaiseiji.buyshop.jp/



D 12月21日(土) 19:00～ **アフタートーク**
2作品 33分

Nothing but memories

デジタル/3分/1997
父の他界に際して、その前後の記録。



ビデオのある普通の暮らし・眠れぬ夜

デジタル/30分/1985
NewファミリービデオVol.2。太陽賞の賞金で購入したビデオカメラが嬉しくて、夏の夜全く眠れなかった...、70年代から80年代にかけてビデオカメラを日常的に使っていた頃の作品。SCANビデオアート展1985 入選作。



大西みつぐ

1952年東京深川生まれ。1970年代より東京下町や湾岸の人と風景、日本の懐かしい町を撮り続けている。太陽賞、木村伊兵衛写真賞、日本写真協会賞作家賞。写真集・著書に『下町純情カメラ』、『遠い夏』など多数。2017年に自主映画監督作品『小名木川物語』を公開。

E 12月19日(木) 19:00～ **アフタートーク**
4作品 32分

間男

8ミリ (デジタル版)/6分/1989
カメラを振って撮影するとブレゴマができる。ブレてないと動画は不自然な動きになる。「映画は静止した写真がつながって出来ている」と言われるがそれは違う。映画の一コマは「写真」ではなく「運動し損なった何か」だ。



間男

サヴァイヴァル 5+3 (デジタル捕獲版)

デジタル/8分/2017
「サヴァイヴしつつある肉体 (癌患者の作者)」を「サヴァイヴしつつあるメディア (8ミリフィルム)」で描き、「主題と手法の一致」を目指す。タイトルの数字は制作時の作者の年齢 (53歳) とフィルム (8ミリ) を示す。

殺人カメラ

16ミリ/3分/1996
映画の中心は撮影者か被写体か?どっちにあるのか?がテーマ。カメラマンがカメラを振れば被写体は写らないし、被写体が逃げればカメラマンは写せない。偉いのはどっちだ?自作オプチカルプリンターによる作品。

ダイレクトライト

16ミリ/15分/1995
映画では撮影時と上映時の光源に矛盾がある。太陽に照らされた女を撮影したフィルムは、太陽では無く映写機のランプで照らされて上映される。これは変だ。そこで私は太陽の下で撮影されたフィルムを太陽を光源に再撮影し、光源の一致を試みたのだが。



ダイレクトライト

芹沢洋一郎

17才の時処女作『まじかよ?』がPFF81入選。流血映画を撮り続けた後ブレソンと奥山順市から「主題と手法の一致」を学び作風を転向。『間男』でIFF90、『殺人カメラ』でサンフランシスコ映画祭入賞。『サヴァイヴァル 5+3 (デジタル捕獲版)』はIFF2017観客賞受賞。

F 12月19日(木) 19:00～ **アフタートーク**
4作品 26分

99.10.10

デジタル/3分/2016

作者の家族の誰かが撮影した1枚の
写真のみで構成された、映像におけ
る空間と時間をテーマとした作品。



99.10.10

Austin

16ミリ (デジタル版)/2分/2016

ある人物の私的空間とサウンドスケ
ープを通して、人間の存在をその不在
からみつめる瞑想的な映像作品。人
物は最後まで画面に姿を現さない、
鑑賞者に話しかけもしない。住居空間にある痕跡だけがその人物の存在
を形作る。



Austin

Fragments

16ミリ (デジタル版)/8分/2017

40年代に米国のFrances Glessner Leeが中心となって手がけた、実
際の犯罪現場をモデルとしたジオラマシリーズNutshell Studies of
Unexplained Deathから着想を得て、実サイズと縮小サイズ、現実
と虚構がいつのまにか交わってしまった、悪夢的な中間点をテーマにし
た作品。

ちよ

16ミリ (デジタル版)/13分/2019

イギリスに住む作者が16ミリフィルム
カメラと共に、長らく会っていない祖
母を訪ね日本へ帰郷する。作者は祖
母と生活を共にしながら、彼女の見た夢、郊外での生活、夏祭り、お盆
風景を通して作者独自の祖母像をフィルムに記録する。家族、老齡、親
密さ、時間、記憶をテーマとした短編作品。



ちよ

島田千絵美

千葉県生まれ。キングストン大学美術学部映像製作専攻卒業制作として2017
年『Fragments』を発表。同大学大学院修士課程実験映像専攻に進み、修
了作品『ちよ』を発表。フィルムとデジタル素材を用いて家族、親密さ、ディ
スプレースメントに焦点を当て制作を続ける。他作品に『Entanglement of
Consciousness』『Austin』などがある。

G 12月23日(月) 19:00～ **アフタートーク**
1作品 71分

台湾、独り言

デジタル/71分/2017

監督 曾根剛、リンデン・ジャ
ング/撮影 曾根剛/出演 エイ
ジ・レオン・リー、チャン・ボム
ソク他/音楽 黄成緯



生徒との関係がうまくいかな

いスペイン語教師のジョンを中心に、多様な登場人物の葛藤が描かれる。
他者との会話が苦手な一方で独り言が多くなるジョンはやがて日常生活
が現実なのか想像なのかわからなくなり、事態は悪化していく…。日本、
韓国、台湾、そしてインド。他者とのコミュニケーションに悩みを抱える
様々な人々を通じて、差別や偏見を超えた絆の意味を問いかけていく。
世界が分裂へ向かう時代だからこそ贈る、国境を越えた群像劇!

曾根剛

欧州3カ国で制作した『パリの大晦日』、米仏3都市で制作した短編『ドッペル
ゲンガー』、LAで制作した『口裂け女 in LA』など海外自主制作映画多数。国
内作品として『透子のセカイ』が上海国際映画祭出品、タイ国際映画祭最優秀
監督賞受賞。撮影した『カメラを止めるな!』で日本アカデミー賞優秀撮影賞受
賞。香港で制作した『二人小町』が2020年公開予定。

H 12月20日(金) 19:00～ **アフタートーク**
2作品 48分
ゲスト・佐藤充

KINETIC CHRONICLE

デジタル/2006

LANDSCAPE 15分

NUDE 3分/サイレント



写真展『KINETIC SCAPE』で静止画で発表した8ミリ作品の動画バー
ジョン。『KINETIC SCAPE』は、この8ミリの中の1カットを再撮影したも
のである。2006年上映時は、『NUDE』と『LANDSCAPE』の二画面
同時上映だったが、本映画祭では、それぞれ一画面ずつでの上映となる。

写真家・須田一政

デジタル/30分 (予定)/2019

監督/撮影 佐藤充

須田一政さんの最後の町歩きスナップ撮影現場を追った。場所は神田界隈、
須田さんの歩行一思考一行動、そして最後にシャッターを押す指先に至る回
路が画面の隅々に映し出されている。須田写真の根幹を示している作品。

須田一政

1940年東京生まれ。寺山修司の劇団天井桟敷の専属カメラマンを経てフリー。
『風姿花伝』にて日本写真協会新人賞を受賞。『人間の記憶』で土門拳賞を受
賞。2019年3月逝去。

I 12月22日(日) 19:00～ **アフタートーク**
10作品 77分

山崎博 × 萩原朔美

協力: 石原康臣、山崎多恵子、イメージフォーラム

山崎博は光と時間を捉えるコンセプトチュアルな写真作品を多く発表して
きた。並行して写真家としての映像作品も多く手がける。山崎の映像
作品と、山崎を映像制作に導いた10代からの友人である萩原朔美の初
期作品等、そして2017年に制作した追悼映像『山崎博の海』を併せ
て上映する。

TIME時の指紋 萩原朔美/デジタル/7分/1971

KIRI 萩原朔美/デジタル/9分/1972

A STORY 山崎博/デジタル/6分/1973

VISION TAKE 1 山崎博/デジタル/3分/1973

観測概念 山崎博/デジタル/10分/1975

VISION TAKE 3 山崎博/デジタル/3分/1978

HELIOGRAPHY 山崎博/デジタル/6分/1979

GEOGRAPHY 山崎博/デジタル/7分/1981

WINDS 山崎博/デジタル/6分/1985

山崎博の海 萩原朔美/デジタル/20分/2018

山崎博

1946年生まれ。写真家。日本写真
協会新人賞、伊奈信男賞等を受賞。
東北芸術工科大学教授、武蔵野美
術大学教授を歴任。主な写真作品に
『ヘリオグラフィー』、『水平線採集』、
『櫻』等がある。2017年逝去。



観測概念

萩原朔美

1946年生まれ。映像作家、演出家、
エッセイスト。60年代後半より、演
劇、実験映画、ビデオアート、執筆
活動等の分野で創作を開始。現在、
前橋文学館館長、多摩美術大学名誉
教授。



山崎博の海

J 12月16日(月)19:00～
4作品 40分 + トークセッション：写真家と映像

写真家の見た映像世界

GMX 小松透/デジタル/4分/2019

2004年から住んでいる団地のベランダから見える給水塔を携帯電話で定点で撮影している。今作品は、iPhoneで撮り始めた10年の冬から現在19年までを撮影したものだ。

Silent Mode 瀬戸正人/デジタル/15分/2019

これは写真の物語だ。写真はある現実が定着してしまった画像ではあるが、その現実が本当の出来事であったのかどうか、もしかしたら、それは幻想ではないのかと感じている。自分の妄想こそが写真ではないかとも思っている。写真の中に潜む人の記憶を呼び覚まそうとする試みだ。

Is That Tokyo Rose?(research + production)

ティム・ポーター(カナダ)/デジタル/6分/2019

※東京ローズ：本名、アイヴァ・トグリは、日本軍が太平洋戦争中におこなった連合国側向けプロパガンダラジオ放送の女性アナウンサー

※Tokyo Rose, real name Iva Toguri, was one of many women hosting Japanese propaganda radio programs aimed at Allied troops during the Pacific War.

www.timporterstudio.com

border | korea

菱田雄介/デジタル/15分/2018

「地図上に引かれた一本の線は、その土地に暮らす人々をどう変えるのか。」ファイナダーの中にたたずみ、風に吹かれながらこちらを見つめる人々。その瞬間ではなく、目の前の佇まいそのものがポートレートだった。



border | korea

公募部門 ノミネート作品

L-1 12月21日(土)15:00～
コンペティション-1

L-2 12月22日(日)15:00～
コンペティション-2

授賞式：12月25日(水)19:00～

大賞：映像施設レンタル2020年末まで3回分の使用権利

審査中につき、詳細は公式HP (<https://film.placem.com/>) をご覧ください。会期中にご来場の方には、ノミネート作品一覧を配布します。



審査員：
瀬戸正人(写真家)

K 12月18日(水)19:00～
8作品 70分

フィルムナイト!

協力：日本映像学会アナログメディア研究会

つたかずら タケヒロ雄太/8ミリ/9分/2011

鳶は絡まり身は朽ち果てて、思い出のかけらは土へ還ってゆく。あの日の貴方の言葉も、僕への眼差しも、二人の尊い時間も、いつか笑って話せたらと。また春に逢いましょう。モントリオール国際映画祭、ロサンゼルス映画祭入選作品。

猫目宣言 大西賢児/8ミリ/3分/サイレント/2012

日頃の撮影スケッチでたまった現象済みのネガフィルムを素材にしてペンライトで生フィルムにイメージを複製、ネガ現象処理だけしてポジ像にしてる実はネガフィルム作品。上映も裏返して後ろからローディング。即席フィルムながらそのギトギトのコントラストを楽しんでいただく1カートリッジ作品。

INGAの世界 奥山順市/16ミリ/11分/1996

ネガとポジ、陰と陽、そして生と死。魑魅魍魎のように彷徨う男は増殖を続け、何処へ行くのか。現象目線で作品を構成し、撮影やオプティカルワークを行った。フィルム現象から上映プリントの作成までを全て自家処理。

Les Grands Boulevards 太田曜/16ミリ/6分/2019

見るモノが沢山ある大通りをぶらぶら歩くのが好きだ、と歌われるパリのLes Grands Boulevardsには映画誕生の歴史もある。スーパー16のサウンド・トラックに写された画像が音(ノイズ)になり同録の音やイブ・モンタンの唄と混ざり合う。

FRIP LIGHT CRUISER 宮崎淳/16ミリ/11分/1998

モータードライブで連写した白黒写真がベースになっている。それをカラーの16ミリフィルムでアニメーションとして再撮影し、さらに多重露光で実景を撮影した。現実とは異なるリアリティを得ること。それがこの手法をとった理由だ。

或る情景・都市河川 水由章/16ミリ/6分/サイレント/1993

井の頭公園から隅田川へ注ぐ神田川。片道約25キロにも及ぶ川を何度も往復するうちに、体から吹き出た大量の汗、三脚を担いだ右肩の痣、足指の水ぶくれ等が自己流の神田川への接近方法だった。全ての橋が、この映画の撮影ポイントである。

青い歩道橋 西村智弘/16ミリ/7分/2003

連続写真を撮り、カッターで切って加工したものをコマ撮りした作品。前作『旋回する通路』と『青い手すりのある石段』を足して二で割ったような作品になっている。

For rest 磯部真也/16ミリ/17分/2017

森の中に設置した食卓をひたすら撮り続けた作品。年月と共に変化する卓上の光景は観客の想像力を喚起させ、被写体からは意味が立ち上がり雄弁に物語を語る。人間と自然、双方の死の対比から生まれたドラマ。



For rest

入場料：1,000円 入替制(上映開始の30分前開場) ※会期中ギャラリーでは写真展を開催(平日のみ12:00-17:00)

	月曜日	火曜日	水曜日	木曜日	金曜日	土曜日	日曜日
	12月16日	12月17日	12月18日	12月19日	12月20日	12月21日	12月22日
15:00 } 17:00	—	—	—	—	—	L-1	L-2
19:00 } 21:00	J	A	K	F E	H	D B	I
	12月23日	12月24日	12月25日				
15:00 } 17:00	—	—	—				
19:00 } 21:00	G	C	授賞式 懇親パーティー				



Place M

〒160-0022 東京都新宿区新宿1-2-11 近代ビル3F

TEL 03-3341-6107

e-mail placemfilm@gmail.com

http://www.placem.com/

映像部門webサイト <https://film.placem.com>